

佐久郡蓼科山は、三のこほりによこたはりて、小縣登る事おのく三十里、水のひゝきのあはれも過て、さえたをしをりぬすゝを分て山に入り、いかづちの床などいふ所を經て、謂ニ潛龍地乎背向にいづ、是より仰ばまかべなす峯あり、磐石を階にふみて登こと三百步、姫子といへる松のばへわたりて、イシャマ畠をつゝみ、霧もる日に映すれば、衣はみどりにそみて、神彩たとへをとるにものなし、すべて頂に土なし、磐石は瓦を鋪たる如く、松は席をゑくに似たり、鳥ありて其中に栖む、爰にあめをいたゞき、雲を踏て、蓼科の神祠をあがめまつる、又四時此峯に白雪あれば、飯盛の山ともよべり、甲賀三郎巖、穴獅子、嵐石、井無音川等の地名あり。

〔信濃奇勝錄 佐久郡立科山 三代實錄ニ蓼科〕

此山、八ヶ嶺につゝきて、諏訪小縣佐久の三郡によこたはる、頂上に神祠あり、陽成天皇元慶二年叙位の事、三代實錄にみえたり、六月八日より二十八日まで登山す、就中十五日登山の人多し、何方より登るも五里程なり故に山中に一夜をあかす、此山峯に雪の降積る事、外山よりも早く、春にいたり解るも又遲し、遠く望めば飯を盛りたる如くなれば、飯盛山ともよべり、巔は渾巖石にて、松一面に延回りて、根も末もなきが如し、葉は姫小松に似たり、俗に延松と云、此巖石の間に鳥ありて栖む、たまく出て遊ぶを、登山の人見る事あり、加賀の白山の雷鳥と云に似たり、○中略這松の中を踏わけ、南へたどる事五丁ばかりにして、櫻谷といふ所あり、此地おしなべて櫻のみにして異木なし、然ども吉野はつ瀬の風情にはあらで、高さ三尺にみたずしてみな藪木となる、是高寒に堪ざるがゆゑなり、花も浮世の春にはもれて、水無月半より發初め、下旬に至て稍盛なり、まことに花より外に玄る人もなし、山中に甘露梅と云草あり、葉は黃楊の如くにて、大小あり、大なるは實白く、小なるは赤し、採て嘗れば味ひ梅のごとし、不老草は常世草ともいへり、諸毒を治し、瘧疫をはらふ、檜木は枝にして、中風痙攣の病を避け、小兒これを佩て、驚癇の煩をふせぐ